

**大粒な米づくり
で、食味向上！**

平成29年
水稲生育情報
第2報

平成29年6月21日
夷隅農業事務所
改良普及課
TEL 82-221

1. 【今年の生育状況について】

- ・生育・分けつは平年並み！
- ・幼穂形成期せまる、穂肥の準備を！
- ・斑点米カメムシに注意！畦畔の草刈りを行い、侵入経路の遮断を！

6月16日発行の県の水稲生育情報では、平年と比較して4月20日頃田植えのうるち品種の幼穂形成期が4日早まっているとの情報が出ています。夷隅地域における主要3品種における生育状況は表1のとおりです。

表1：定点調査ほ場の生育状況（6月14日現在）

品種名	調査場所	田植え	平年比			幼穂形成期 予測日
			葉齢の進み	草丈	茎数	
ふさおとめ	いすみ市島	4月21日	並	並	並	6月17日
ふさこがね	大多喜町下大多喜	4月21日	並	並	多い	6月20日
コシヒカリ	いすみ市松丸	4月19日	並	やや低い	やや少ない	6月25日

※幼穂形成期：幼穂の長さが1mmになった頃で、出穂の25日前頃

2. 【今年の中干しの適期について】

「大粒で食味の良い米を作る」、「乳白米等の無い高品質の米を作る」、「天候不順な年でも安定した収量を得る」ため、中干しの適期実施に努めて下さい。本年は茎数が少なめで推移していることから、目的となる茎数が確保できたら、速やかに中干しを実施して下さい。中干しの期間は地面に軽くヒビ割れができる程度までとします。

中干しに入る茎数の目安

ふさおとめ：(60株/坪) 22～24本/株

ふさこがね：(60株/坪) 20～21本/株 (50株/坪) 23～24本/株

コシヒカリ：(60株/坪) 17～20本/株 (50株/坪) 21～24本/株

3. 【穂肥施用のポイント】

参考までに、穂肥用の資材を表2に示しました。穂肥の時期は早過ぎても遅過ぎても、米の品質の低下を招くため、適期施用を心掛けてください。登熟期間の短い「ふさおとめ」は、「出穂前25日～18日」に行いましょう。また、「ふさこがね」「コシヒカリ」は「出穂前18日」に施用しましょう。

表2：穂肥用資材の例

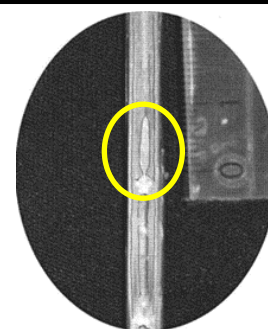
資材名（N,P,K成分量%）	10aあたり施用量	備考
NK-C6(17-0-17)	15~20kg	即効型資材
SCNK化成（14-0-14）	15~20kg	肥効50日型資材
有機追肥530特号(15-3-10)	10~20kg	有機稲作資材
軽量追肥15(22-2-14)	10~15kg	軽量・低コスト資材

表3：いすみ地域における水稲管理時期の目安

品種	田植え	中干し開始	中干し終了	穂肥適期	出穂期	収穫期
ふさおとめ	4月20日	6月1日	6月12日	6月20日	7月12日	8月15日
ふさこがね	4月20日	6月1日	6月16日	6月28日	7月15日	8月21日
コシヒカリ	4月20日	6月1日	6月20日	7月4日	7月20日	8月28日
	4月30日	6月4日	6月23日	7月7日	7月23日	8月31日

◎幼穂長の測定手順◎

- (1) 生育が中庸な稲株の主茎（最も長い茎）を株元から引き抜きます。
- (2) カッターナイフ等で主茎を縦に割り、右写真のように幼穂長を測定します。



幼穂長 1.0cm 時の断面図

※連続した5株分の幼穂長を測定し、4株以上で幼穂長が1cm以上であれば穂肥散布適期に入っていると判断してください。

表4：出穂前日数と幼穂長の関係

出穂前日数	幼穂長
25日 (幼穂形成期)	0.1cm
18日	1.0cm

4. 【倒伏しない稲づくりのために】

表3に示した穂肥の適期は目安ですので、稲の生育状況を見て、施用時期、量等を調整してください。特に「コシヒカリ」の幼穂形成期の生育が、表5の範囲を大きく上回っている場合は、倒伏の心配がありますので、穂肥を減らす、遅らせる、倒伏軽減剤（表6参照）を使うなどの対策を講じてください。

表5：コシヒカリの標準的な穂肥ができる幼穂形成期の稲の姿

品種	m ² 当たり茎数 (本)	1株当たり茎数 (本)	群落葉色 カラースケール値	草丈 (cm)
コシヒカリ	430~560	23~30	3.5~4.0	70

注 (1) 1株当たり茎数は60株/坪の場合の1株平均茎数

(2) 群落葉色は、カラースケールを吊るすなど固定し、太陽を背にして3m離れて観測する

表6：水稻の倒伏軽減剤

薬剤名	施用時期と方法	10aあたりの使用量 (散布液量)
ロミカ粒剤	出穂25~10日前までに湛水散布	2~3kg
スマレクト粒剤	出穂7~20日前までに湛水散布	2~3kg
ビビフルフロアブル	出穂10~2日前までに茎葉散布	75~100mL/10a (通常散布50~150L/10a)

5. 【水稻のカドミウム対策（幼穂形成期以降の水管理）】

図2を参考に、出穂前3週間~出穂後2週間の5週間は、湛水管理を心掛けてください。自然由来のカドミウムの吸収を抑えるために必要な技術です。

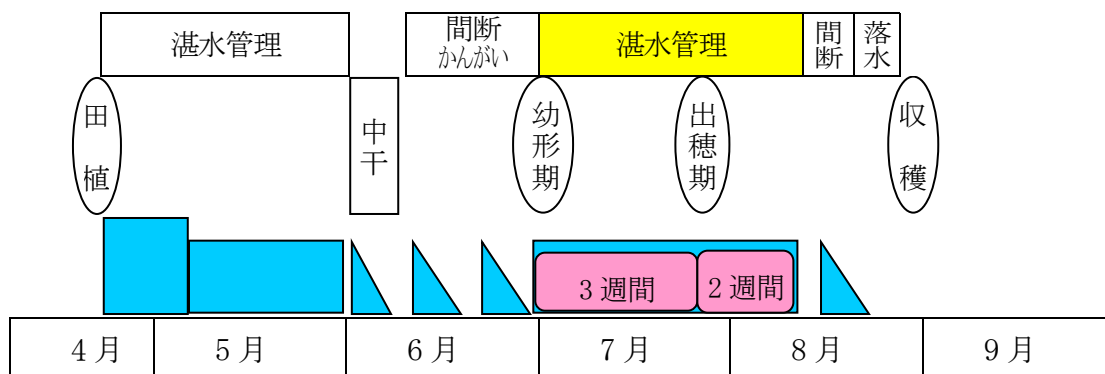


図2：カドミウム吸収を抑制する水管理

6. 【幼穂形成期以降に発生する主な病害とその防除について】

(1) いもち病

25～28℃くらいで湿気の多い時に発生しやすくなります。密植・茎数が多めのほ場や、日当たりの良くないほ場では特に注意してください。「葉いもち」の初発は6月中旬頃です。「穂いもち」は発病してからでは手遅れになるので、出穂前7日～穂ばらみ期に1回、穂ぞろい期に1回の合計2回の防除が望ましいです。表7を参考に薬剤を散布してください。

(2) 紋枯病

30～32℃くらいで湿気の多い時に発生しやすくなります。登熟期に高温条件となりやすい早生品種では特に注意してください。窒素過多でも発病が助長されます。出穂前14～7日に表7に示す薬剤を散布してください。

(2) 稲こうじ病

穂ばらみ期に低温・多雨になると発生しやすくなります。出穂前10～14日に表7に示す薬剤を散布してください。

表7：いもち病・紋枯病・稲こうじ病の主な防除薬剤

薬剤名	使用時期	10aあたり使用量	適用病害
フジワン粒剤	【葉いもち】初発7～10日前まで/2回以内 【穂いもち】出穂10～30日前まで/2回以内 いずれも収穫30日前まで	3～5kg	いもち病
	出穂10～30日前まで/2回以内 ただし、収穫30日前まで	4kg	稲こうじ病
ブラシンフロアブル	収穫7日前まで/2回以内	1000倍希釈液60～150L	いもち病 稲こうじ病
モンカット粒剤	出穂30～10日前/ただし、収穫14日前まで3回以内	3～4kg	紋枯病
バリダシン液剤5	収穫14日前まで/5回以内	1000倍希釈液60～150L	紋枯病



葉いもち病

(JPP-NET HPより引用)



穂いもち病

(JPP-NET HPより引用)



紋枯病

(JPP-NET HPより引用)



稲こうじ病

(JPP-NET HPより引用)

7. 【斑点米カメムシ類の防除について】

畦畔に繁茂するイネ科雑草が斑点米カメムシ類の本田への侵入経路の中継地となっています。よって、斑点米カメムシ類の被害を防ぐためには、ほ場周辺のイネ科雑草が出穂する前に除去することが効果的な防除方法となります。稲の出穂2週間前までに畦畔の草刈りを行い、カメムシの飛来を予防するよう心掛けてください。また、表8に示す薬剤を参考に薬剤防除も合わせて行うと効果的です。

表8：斑点米カメムシ類の主な防除薬剤

薬剤名	使用時期（使用回数）	10a使用量	散布適期の目安
エルサンバッサ粉剤20DL	収穫7日前まで（2回以内）	3~4kg	穂ぞろい期～乳熟期
トレボン粉剤DL	収穫7日前まで（3回以内）	3~4kg	穂ぞろい期～乳熟期
スタークル粒剤	収穫7日前まで（3回以内）	3kg	穂ぞろい期～乳熟期



アカスジカスミカメ

(千葉県農林総合研究センターHPより引用)



斑点米の被害粒

(千葉県農林総合研究センターHPより引用)

8. 【今からでも間に合う、ジャンボタニシ対策】

今年のジャンボタニシによる稲の加害時期は過ぎました。しかしながら、今のうちから次年度に向けて数を減らしましょう。今からでも実施可能な対策を以下に示します。

(1) 卵塊の水没

稲株や畦畔に産み付けられた卵塊を、早めに水たまりに落として卵の孵化を防ぐか、踏みつぶしてください。

(2) 中干し時の誘引及び殺貝

中干し時期に、田面に残った水たまりにキャベツやレタスの葉などの餌を設置して、貝を誘引させ捕殺してください。